

『無変化日常無記載日記』
ドブ川グループ

目覚ましの音が、まどろんでいるわたしを強制的に覚醒させる。

携帯のアラームに起こされるたび、鳴り響く音楽が嫌いになっていくのを感じていた。

最初は有名人気バンド、次は国民的アイドル、そして今日は懐かしい癒しボイス。

へピーローテーションで聞くほど好きだった音楽は、時と場所を変えると雑音にしかならなかった。

「あつたまダルつ……」

思わず口から溢れる愚痴は本心のものだ。

ふらりふらりと体を動かし、ジャカジャカ喘いでいる携帯を掴んで、寝ぼけまなこで部屋に立つ。

高校入学と共に張り替えた薄いピンクの壁紙は、一年たったら汚れが目立ってきた。

「今何時……?」

そうね、だいたい七時。携帯の液晶は0709を表示していたからギリギリせーふ。

口をポケットと開けたまま立ち尽くしていても、未来にも学校へも行けないので、着替える

ことにした。

カット。お恥ずかしながら、下着姿はたいしたこと無いので描写しません。

胸だつて大きくないしうっせえばかやろう。こちとらスタイリッシュにスレンダー、稀少価値なんてものにはならないのです。

学校の制服をえんやこらと頑張つて着る。決してこれは太っているんじゃないやなくて、入学当時よりも身長が伸びたからであつて、横には広がってないんだからねっ。

現実是非情であるので、まあ体重も増えちゃっているわけで。人間は日々成長するのである。良くも悪くも。

机の上に乗せてあつたカバンを掴んで、部屋を出る。ギヒイイイイ。怖っ。

扉が閉まる音が不自然なのは、長年わたしがひどい扱いをしていたせいだ。ごめんね蝶番。無機物に謝罪の言葉を伝えて、わたしは朝食を摂るためにキッチンへと向かう。

キッチンに入る扉を開けると、いつもの平穩無事な家族の姿がそこに存在していた。イスに腰掛けてテレビのニュースを凝視しながら朝食を食べるお父さん。

慌ただしい朝の騒動を一拳に引き受けているお母さん。

頭の髪を跳ねさせたまま寝間着姿で食事を摂るお姉ちゃん。
たつた今部活の朝練のために家を出た弟くん。

味噌汁の味に舌鼓を打つおじーちゃん。

ゆつくりと歯に優しい柔らかい食べ物を食べるおばーちゃん。
そして庭でマヌケな顔をして寝ている飼犬。

みんなが、わたしの日常を構成している。

こんな平凡な日常は、わたしの人生に必要なものかなと、時折疑問を持つてしまう。
わたしが自分の席に座ると、すかさずお母さんがスクランブルエッグの乗った皿を置く。湯気の立つご飯もその隣に置かれて、わたしの朝食が形成される。スクランブルエッグには塩コショウがかかっている。わたしは素材そのままの味を楽しむのが好きなのだ。味音痴と言われることもあるけど、否定はしない。気分次第でしようゆをドバドバかけて食べることもあるからね。

玉子の味は甘くて、一緒に焼かれたハムもおいしい。

こんな料理つくりたいなあ、ポヤーつとしていたらお姉ちゃんに指摘された。

「口開けてるよー」

そういうお姉ちゃんは机に突っ伏しているよー。行儀悪いよー。

などと思っていたら、お姉ちゃんがお母さんにチョップされた。いたいよー、と嘘泣きをするお姉ちゃんを見ていると、本当に社会人なのかなあと思ってしまう。

わたしはモツチャモツチャとご飯を咀嚼するお姉ちゃんを追い抜いて、食事を終えた。ごち

そうさまでした。

そこまでがいつもどおり、いつもと違うのはここから。

玄関を出るところだったわたしを、おぼーちゃんが呼び止める。

「これ、そこのお嬢さん。お願いがあるんだが聞いてもらえんかね？」

「なーに？」

「これを持っていくのじゃ」

おぼーちゃんは、普段使わない古めかしい言葉を、わざとらしく使った。こんなときは、大抵しようもないことを頼まれることを、わたしは知っている。

おぼーちゃんの差し出す手の中には、一枚の手紙が握り締められていた。くしゃやくしゃに丸まっていて、しかも茶色く変色している。年代物かな。

怪しく思いつつも、受け取らなきや学校には行かせないって感じで、わたしは仕方なくその手紙を受け取る。

「それと、これもじゃよ」

続けておぼーちゃんが渡してきたのは、五千円札だった。

「お小遣いもらったらお母さんに怒られるよ」

断ろうとしたけど、おぼーちゃんはわたしに何も言わずに、それだけ渡して家の奥へと行ってしまった。

少し下心があつたわたしは、他の家族に見られていないことを確認してスカートのポケットの中へとお金を入れた。

見慣れない風景が流れる車外。それを見ながら、なんだか虚しい気持ちになつてくる。

駅の構内で、おぼーちゃんからもらった手紙を読んでみた。

達筆なのか汚いのか、判断出来ない文字が書かれている。

でもそれを見たとき、なぜだかわたしは心惹かれた。

普通の何気ない日常に起こつた一つの事件、人生を楽しむスパイスなようなもののように感じただけからだ。

だからわたしは、学校に向かう電車を乗り過ごして、反対方向の電車へと飛び乗る。

無断で休むことは今まで無かつた。優等生つてわけではないけど、今までズル休みはしたことはない。

それすらも普通なんじゃないかと、二年になつてからはよく思うようになったけど。

軽い不良ぐらいが丁度いいと、お父さんもよく言っていた。おかげでお姉ちゃんはダメ人間になつて、わたしと弟はそれを反面教師とすることになつたけど。

ふと、車内の人からの視線を感じる。

高校の制服は指定なので、その制服を来た人間が学校に向かわない電車に乗れば、わかる人

間にはわかってしまう。

目立つのは好きではないけど、唐突に決めた一人旅で服装を気にする余裕はなかった。もしかしたら制服に劣情を催す人間もいるかもしれない。

でもねえ、それほど美人さんなら、もう少し充実した生活を送っていると思う。ちやほやされる人間は、やっぱり拒否しないからちやほやされるのだ。

電車に揺られること、二時間以上。乗り換えもなく、ただただ線路を走る電車。退屈な時間だった。色々なことを考えていた。

なんでこんなことをしたのか、とか、学校から家に連絡行っているかなあ、とか。

あとは、おばーちゃんは何でわたしに手紙を渡したのか。ぶっちゃけそれがほとんど。手紙の内容については、時々思い出すだけで深くは考えなかった。

何かが有るかもしれないし、何も無いかもしれない。

行ったらわかる、当てたことのない女のカンがそう伝えていた。